

中世英語散文におけるワードペア、フレーズ および関連表現についての一考察

青木 繁博

A Study of Word Pairs, Phrases and Related Expressions in Middle English Prose

Shigehiro Aoki

0. はじめに

中世英語散文とワードペアと呼ばれる表現の関係については、ワードペア研究における第一人者とも言うべき Inna Koskenniemi の、比較的新しい論文の冒頭において端的に表現されている。

The use of repetitive word pairs, or binomials, of the type *joy and bliss*, *strong and mighty*, is a well-known stylistic feature of medieval prose in English as well as in other languages. (Koskenniemi 1983, p.77)

他の言語、あるいは別の時代におけるワードペア表現というのも興味深いテーマではあるが、ここでは中世英語散文におけるワードペアについての分析を試み、ワードペアの持つ様々な性質について考察を加えたい。

上記 Koskenniemi にもあるように、ワードペアは中世英語諸作品において頻出する重要な表現と認められるものである。しかしながらワードペアの本質を解明するという意味で、その性質、機能や文中で果たす役割などに関して十分な説明がなされてきたかどうか、また多種多様なワードペアを包括的に扱うことができるかどうかについては、疑問が残る部分もある。

The acoustic, structural and semantic functions of repetitive word pairs vary with the literary genre, with the writer's style and with the quality of the vocabulary at work; furthermore, between verse and prose word pairs display subtle differences in various aspects of their use. (Kikuchi, p.13)

Kikuchi にあるように、諸作品に見られるワードペアの機能は文学ジャンルの違いや、韻文か散文かなどといった条件によって異なるものである。したがって諸作品を比較して考察を行なう際、ワードペア全般についての一般的な特徴を見定めることは非常に困難で、また大きな問題点を含むものであ

ると言われている。

1 作品あるいは特定のジャンルといった限られた範囲であっても、ワードペアの用例を多く収集することによって、多様な面が見えてくることがある。ワードペアの用例の中には2つのタイプ、すなわち慣用的に用いられたワードペア（「定型句としてのワードペア」）と、その場に応じた表現として新規に生み出されたワードペア（「表現技法としてのワードペア」）という大きな違いもあるのではないかと考えている。このようなワードペアの区分を生かしつつ、本論文ではいくつかのワードペア表現を取り上げ、実際に用いられている状況や文脈も考慮して分析する。またワードペアを考察する過程においては、ワードペアに関連する表現、具体的にはワードペアが「崩れた」ような表現や、2語からでなく3語以上からなる表現などについても、併せて分析を試みることにする。

なお前述のジャンル等の問題に関して言えば、本論文では *The Cloud of Unknowing* の電子テキスト版を中心にワードペアの例を取り、また「条件」の近い諸作品、すなわち神秘主義的な散文作品も見渡して、そのいくつかから取ったワードペアの例とも比較する。作品間のワードペアの用例の違いについては、場合によっては根本的な相違もあるかもしれないが、広く用例を比較することによって、ワードペアの持つ多様さを明らかにすると共に、逆に共通する傾向や性質を探る手がかりとしたい。

本論文で例を取る作品（およびこれ以降の省略表記）²

The Cloud of Unknowing (*Cloud*)

The Book of Privy Counselling (*PC*)

The Showings of Julian of Norwich (*Julian*)

The Book of Margery Kempe (*Margery*)

Nicholas Love's Myrroure of the Blessed Lyf of Jesu Christ (*Mirror*)

金曜日の章 (*Friday*)

土曜日の章 (*Saturday*)

サクラメントの章 (*Sacramento*)

1. 定型句としてのワードペア

ワードペアの中には、同じ組み合わせの表現が、1つの作品だけでなく他の作品にも共通して見られるものが含まれている。そのような表現を「定型句」としてのワードペアと呼び、まずはそうした用例から考察することにする。

1.1. 典型的な定型句

これは、同じ組み合わせの語句が、そのままの形で頻出したり、あるいは広く他の作品にも共通し

-
- 1 ワードペアの区分に関しては研究発表「定型句としてのワードペア、表現技法としてのワードペア」(日本中世英語英文学会23回大会、2007年12月)において考察した。
 - 2 用例を挙げる際にページや行を表記する場合は、BibliographyのTextsに挙げた版を基にして「ページ/行」と表記するが、*Cloud* (電子テキスト版)については行のみの表示となっている。また *Mirror* の各テキストについてはrectoとverso、LeftとRightのコラムと行を表記する。なお検索などの際には、JulianについてはCrampton、MargeryについてはStaleyの電子テキスト版も利用した。

で見られるようなワードペアである。用例の中には慣用的な意味合いしか持たないもの、単に儀礼的に用いられているに過ぎないようなものも含まれていると考えられる。また定型句としてのワードペアの中には、決まった型で用いられるだけでなく、語句のつなぎ方が様々であるといったヴァリエーションを持つものもあり、以下のいくつかの例ではそうした面も見られると思う。

■BODILY & GHOSTLY

- 221 *bodily* and *goostly*
- 533 *bodily* and *goostly*
- 563 *bodily* and *goostly*
- 604 *bodily* and *goostly*
- 950-951 *bodily* besines and *goostly*
- 1759 *bodily* and *goostly*

*Cloud*において and によって結び付けられているものは以上の6例だが、この他に *neither ... ne ...* によるもの4例、*or* によるもの(“*whether ... or ...*”, “*outher ... or ...*”を含む)が19例など、様々な形で結び付けられており、以下はそうした例の1部である。*PC*、*Julian*、*Sacramento* にも用例がある。

- 401 *neither bodily ne goostly*
- 429-430 *whether ... bodily creatures or goostly*
- 582-583 *bodily or goostly*
- 1331-1332 *outher bodily or goostly*

■BODY & SOUL

- 145-146 *bothe with body and with soule*
- 748-749 *bothe body and soule*
- 1459 *the body and the soule*
- 1487 *in body and in soule*
- 1495 *in body and in soule*
- 1579 *in body and soule*
- 1596 *in body and in soule*
- 1688-1689 *with body and with soule*
- 1690 *bothe in body and in soule*
- 1802 *of body and of soule*
- 2044 *The body and the soule*
- 2073 *in body and in soule*
- 2453 *in body and in soule*

*Cloud*では以上の13例が用いられている。さらに、*and*ではなく *as well ... as ...* によるものが4例ある。

161 as wel in *body* as in *soule*
 1493 as wele in *body* as in *soule*
 1631 as wel in *body* as in *soule*
 1874-1875 as wele in *body* as in *soule*

Cloud 以外のテキストでは、Sacramento に 3 例 (164rL12, 169vR26, 170rL24-25) また Julian では多くのテキストで見られるものとは逆の語順のもの (*soule* and *body*, 11/34) などを確認することができた。

なお、このようなペアに共通する性質を持つ表現として、FLESH & BLOOD も挙げることができるかもしれない。現代英語においても見受けられるこのペアは、例えば Sacramento においては 157vL11-12 など 8 例が用いられているほか、Julian でも見られるものである。しかし *Cloud* においてはそのペアの例を見つけることはできなかった。なお *Cloud* で *flesh* に関連する語 (*fleschly*) がペアとして用いられている例をいくつか挙げてみると、

1592 *fleschly* and *bodily*
 1597 *fleschly* and *bodily* counforte
 1599 for *goostly* blyndnes and for *fleschly* chaufyng
 1771 *bodely* and *fleschly*

など、“*bodily*” や “*goostly*” といった語句とのペアが見られ、*Cloud* ではむしろ前述のペア (BODILY & GHOSTLY) との関連性が高いとも受け取れる。

■ QUICK & DEAD

604 *quik* and *dede*

Cloud ではこの 1 例のみだが、Margery では 34/1, 39/15, 67/33, 253/24 の 4 例が、また Sacramento にも 166vR22-23 に 1 例と、幅広く使用されているペアである。

■ ANSWER & SAY

544-545 to this I *answere* and *sey* that ...
 1154-1155 then I *answere* thee, and I *sey* that ...
 1480 than I *answere* thee and *sey*: "..."
 1545-1546 Bot to this I *answere* thee, and I *sey* that ...
 2108 And to this wil I *answere* thee so febely as I kan, and *sey*:
 2383-2384 And to thees men wol I *answere* as febely as I kan, and *sey* that ...

1480、2108 の 2 例が直接話法の文を導いている (これについては後述)。

Cloud 以外のテキストにおいても、

Julian 100/1-2 *answeryd* ... and *seyde* these wordes, ...

この Julian の例の他、PC 137/12, 152/26, 161/1, 172/11 に 4 例、また Friday (112vR12 など) や

Saturday (132vL13) など、実際には大抵のテキストに見られる表現で、中世英語において非常に頻繁に用いられたものである。

まだサンプルが少ないために印象の域を出ないものだが、上記 ANSWER & SAY の例などからは、定型表現の語を様々な形に応用し、間にいくつかの語句を挟んで用いる傾向が、Julian や *Cloud* にはあるようにも思われる。そのような「定型句をそのまま使わない」点については、後述の表現技法としてのワードペアのように、慣用句的ではない何らかの動機に基づくものかもしれないと思われる反面、そもそもそれが定型かどうかという問題もあり、ワードペアの区分に関わる課題となっている。

& SAY を含む表現に関して、橋本（『聖書の英語』、第 章 欽定訳聖書における旧約原典の影響）によると、聖書に頻繁に用いられるこれらの表現については「saying または and say(s) / said の後には直接話法の文が来ている」(p.113) とある。これは、「直接話法の文を導入するためのヘブライ語法の訳である」(p.114) ためであるが、上に挙げた *Cloud* の用例のリストでは、むしろ間接話法が後に続くことの方が多い。その点からは、すでにそうした語法に関する伝統の一部が失われてしまったのではないかと推測される。

1.2. 作品によって頻出するペア

定型句としてのワードペアの中でも、他のテキストとの間で広く見られる訳ではないのだが、1 作品中で頻出する語の組み合わせもあり、おそらくそうした表現のいくつかは、上述の典型的な定型句と同様の動機によって結び付けられ、用いられていると推測される。現段階では 1 作品でしか見られないが（または、まだ見つかっていないのだが）、その頻度や内容などを考慮すると、以下のような例がそれにあたると思われる。

・ GOOD & EVIL

147 bothe *good* and *ivel*

上の例のように and によって結び付けられているものが 6 例、さらに or や ne などによるものが 6 例ある。

・ MEN & WOMEN (または MAN OR WOMAN)

640-641 *men* and *wommen*

486 *man* or *womman*

and による 5 例はいずれも複数形だが、対する or による 14 例は、537-538 での 1 例を除く 13 例すべてが単数形であった。その点も含めて「固定されて」結び付いている面もあるのではないかと推測され、特に慣用句的な性質を示す表現と言えるだろう。

・ CHEER & COUNTENANCE

Margery 40/3-4 *cher* & *contenawns*

Margery のみ、全 12 例。

上に挙げたものに加えて、例えば Malkiel が現代英語に関して “irreversible binomials” として挙げ

た表現、中でも *husband and wife, knife and fork, hammer and tongs, back and forth* などの例 (p.115より) については、これらはおそらく我々がイメージしやすいものとして提示されたもので、決して代表的な表現という位置付けではないだろう。しかしながらこのような日常的な語がペアになっていることについては、ワードペアを全体的に見渡す上で見逃せない要素ではあり、ここで扱うテキストからも同種の表現をいくつか例示することにする。これらはいずれも今後の検証が待たれるものである。

the windowes and the dore (268), *metes and drinkes* (665), *inner and utter* (1890),
ete & drink (PC 147/18-19), *nygth & day* または *day & nygth* (Margery 7/27, 8/7-8, *Cloud* にも),
toward & froward (Friday 116vL19-20), *vp and down* (Sacramento 166rR20)

もっとも、1 作品に限られるペアの場合、その意味やテキストの内容も考慮し、以下のような表現については特に留意する必要があると考えられる。以下のペアは、それぞれのテキストや前後の文脈において明らかに重要な意味を持つ語がワードペアになったものである。そのような性質上、ここまでに言及した定型句としてのワードペアとは大きく異なる機能や役割を持つ可能性がある。

- ・ CLOUD & DARKNESS (*Cloud* に 8 例)
- ・ PASSION & SORROW, PASSION & DEATH など (Friday にそれぞれ 3 例、2 例)
- ・ BREAD & WINE (Sacramento に 3 例)

Cloud における “ cloud ” のペアのように、明らかに重要な語句に関わるペアについては、頻出するといえ決して慣用的に用いられているとは考えられない。このようなペアに限っては、「定型表現」というよりも個々の作品における特徴的なワードペアとして位置付けたり、あるいは定型表現であっても意図や効果を狙って利用されている、などと分析する方が、ワードペアの実態に合った考察ができると考えられる。

Koskenniemi (1975) では、*dalyawns & communycacyon, spech & dalyawns* といった Margery に固有のペアについて、以下のような考察がある。

Some word combinations relating to mystical experiences are almost uniquely employed in *The Book of Margery Kempe*. An example is the noun *dalyawns* which appears in the meaning ‘ spiritual dialogue with God ’ and often forms a word pair with such near-synonyms as *speech* and *communicacyon*: . . . (p.216)

このような考察からは、*dalliance* の、現代英語の意味とは少しニュアンスの異なる用法が明らかとなっている。

以下の考察 (特に 2 . 1 .) では、こうした重要語句に関するペアの例示も含めて、表現技法としてのワードペアを広く考察していきたい。

2 . 表現技法としてのワードペア

作品・章の内容、概念、教義などに直結するワードペアや、あるいは詩的效果をねらったワードペアなどについては、その機能は一言では言い表せないものなのかもしれない。その場で新規に生み出

された表現、「表現技法」としてのワードペアの例からは、強調する部分や「説明」の機能、明確に教えたいとする意図なども汲み取ることができる。いくつかの箇所では文章としてより装飾的になることを目指したものが含まれる。機能としてはこのような諸々が混ざり合いながら、表面的には比較的簡潔な形式であるワードペアとして表われていることは注目すべきであり、短い中で多くの効果を生み出そうとする点こそが、まさにワードペアの特徴の1つであると言うこともできる³。

2. 1. ワードペアの「説明」の機能

説明の機能とは、ワードペアの解釈としては古典的とも言えるもので、ワードペアとは「同意語」同士の関係であり、意味が同じ語を結び付けることによって不明な語の意味を説明するものとする見解である。説明の機能が有効な場面も多いのは事実だが、現時点では数多くあるワードペアの機能の1つとして位置付けるのが妥当である。ただし、古典的な説明の機能を越えて、「説明」や「同意」といった部分を拡大して考察することによっては、ワードペアのさらなる理解につながるのではないかと考えている。

Yamaguchi は、ワードペアで同意語が結び付けられていることに関して、“Synonyms may be repeated in order to bring out the idea more clearly”(p.40)と述べている。ここで言う“the idea”は、語の意味に止まらず、その奥にある概念についても結び付けられ、明らかにすると解釈することもできるのではないだろうか。さらに、必ずしも同意語でなくても、語や語句が結び付けられることによって様々なものが「説明」される例を見ることもできる。また中には説明するといった機能が優先され、形式が崩れたような表現も見ることができる。

極めて重要な語句からなる表現

165-166 *the comoun doctrine and counsel of Holi Chirche*

1957-1958 *the comoun doctrine and the counsel of Holy Chirche*

これらは「同意語」ではないが、両者は一致するものとして、教化などを目的にあえて結び付けられた語句であると考えられる。なお同様の言い回しは他のテキストにも見られる。

Julian 6/6 *the grace of God and teeching of holie church*

Sacramento 167vL5-7 *to trewe bileue & to the doctrine of holy chirche*

また以下の例に見られるように、極めて重要な語句が and によって結び付けられる表現が見られる。これらは各々の語というより、それが指し示すものが1つであることを強く感じさせるものである。

257 *King of kynges and Lorde of lordes*

369-370 *bi His Godheed and His Manheed togeders*

2071 *verrey God and verrey Man*

神や教会といったものに関する表現については、本論文で扱うテキストの性質上、語としては別のものであっても「概念」や「教え」としては同一であると表わされたもの、とするのが適当であると

3 ここでの分析に関して、機能のいくつかについてはKoskenniemiほかの先行研究によるところが大きい。また特にワードペアと文体の関連性に関しては谷明信先生からHigh Styleとワードペアの関連について教示を受けた内容を参考にしている。

思われる。

同意の語句からなる冗長な説明

Friday 120rL16 *byholde and se*

上に例示したものは、何かに着目せよといった場合によく用いられる決まった表現であるが、ワードペアとして分析した場合、ほぼ同じ意味を持つ2語が結び付けられている例の1つとして考えることもできる。

これと比較して、下で結び付けられている2項目もほぼ同じ意味であると言えるが、こちらは「語」同士の組み合わせに還元することはできない。

PC 150/3-4 *ben blynde & mowen not . . . se*

こうした表現は、その場に応じた適切な同意語がない場合でも、ある表現を同意の語句と結び付けたいとする表現上の要求を満たしていると考えられる。

Cloud からは、以下のように多くの例を挙げることができる。

670-671 *gilty and combrid with any soche synnes*⁴

680 *stonde and not falle*

1274-1275 *withholden, and not withdrawen*

1640-1641 *folily and lackyng kyndly discrecion*

1802 *woodnes and no wisdom*⁵

2054-2055 *on hors and not on fote, and paraventure it is in going and not stondyng*

2470 *hanging and not fully declarid*

これらの例のほとんどは、反意語が not や no と共に並べられているため、and の左右は同じ意味になるという当然の論理的な関係性を持つ。意図としては、例えば誤解が生じないように丁寧に状況を説明するといった態度も伺えるものの、2054-2055の例のように多用された場合、冗長な印象は否めない。

前述した古典的な「説明」の機能においても、意味が同じ語であっても語源が異なっていたり、ニュアンスが異なるなど、そこには何らかの相違を見出すことができたはずである。すなわちワードペアにおける2語の間には冗長さ以上のものがあり、またそこにある機能や効果などを分析することがワードペアの考察でもありとされる。翻って、上に挙げた状況説明的な表現を見ると、同意語を並べること以上に冗長的な表現のようでもあり、「形を整える」といった、おそらくワードペアが成り立つ上で重要な1つの「要素」を除いて組み立てられた、という解釈も成り立つだろう。

このような表現（様々な理由から同等とは呼べない2項目が結び付いた表現、語数や語形などの面で形が整っているとは言えない表現）が、後で考察する、文体においてバランスを取るものであるかどうかは不明である。これらをワードペアとして扱うべきか、仮にそうだとした場合ワードペアの本質的な利用であるのか、考察すべき課題は多い。しかし上のような考察を通じて、特に同意語的な語か

4 FOOTNOTESより、“671 combrid, encumbered”

5 FOOTNOTESより、“1802 woodnes, madness”

らなるワードペアと比較することにより、逆にワードペアが持つ様々な性質、すなわち厳密な同意語の組み合わせに限られない点や、必ずしも冗長な表現ではないといった面を浮き彫りにしたということもできる。

2.2. ペアとフレーズ

多くの作品では、1語同士が結び付けられた表現だけでなく、数語単位で結び付けられているものなども見られる。これらは対句であるとされることも多く、ワードペアとして扱えるかどうかは判断が難しいケースもある。2語からなるワードペアと、それ以上の語からなるフレーズとの関係については、構造や組み合わせといった観点からは共通点もあり、また考察にあたってはいくつかの問題点も見えてくる。個々の表現の考察を進めると共に、ここではそうした点についても言及したい。

谷は後述の Koskenniemi (1968) におけるワードペアの区分(3語以上からなる表現などを含むもの)をも踏まえて、当該の論文においては、2語のペアを考察の対象にするほかは「3語から構成されるワードペアは必要に応じて取り扱い」、それ以外のものについては対象とはしていない(p.20)。もちろん、これはワードペアを扱う上での1つの明確な指針であると言える。

Koskenniemi (1968) のワードペアの区分に関する記述(p.12)を見ると、2語よりも多くの語からなる表現には、大きく分けて2つのパターンがあることが読み取れる。1つは「単語」が(2語であればペアだが)3語以上並置されたもの。もう1つのパターンは、“single words”でなく“word-groups”、すなわち複数の語からなる語句がペアになったもの(または“single words”と“word-groups”とがペアになったもの)である。

Cloud に同様の例を探すと、以下の例などがそれぞれにあたると考えられる。

・ 3語以上

718 the *filthe*, the *wrecchidnes* and the *freelte* of man

・ 語句と語句

363-364 *habundaunce of freelte* and *slownes of sperite*

・ 1語と2語

284-285 *clensid* and *maad vertewos*

ここまででも様々なパターンがあったのだが、このようなフレーズには、実際にはさらに多くの組み合わせが存在し、中にはワードペアとの関係性を示すものも見られる。以下のような「複数のペアが合わさった表現」についてはどうだろうか。

730 *sodenly* and *partitely lost* and *forgetyn alle wetyng* and *felyng* of his beyng

これは3組のペアが組み合わせられているものだが、それぞれのペアは品詞や語尾など、比較的容易に見て取れる部類の組み合わせで、また *and* の直前直後にすぐにペアの相手が見つかる。なお *wetyng* and *felyng* は他でも頻出する組み合わせのペアでもある。こうした複数のペアの組み合わせの中には、さらに複雑な組み合わせ方や、対応する語句が離れているものなども存在するため、ワードペアやフ

フレーズを分析する際には注意すべきである。

また、以下の2例を比較してみたい。

1261 His grete *grace* and His grete *curtesye*
1869 *unstabelnes* of *herte* and *unrestfulnes* of *mynde*

前者の例では形容詞は同じものが用いられている。それを除き、*grace* と *curtesye* の間に単語同士のペアとしての結び付きを見出すことができる。対して後者は形容詞も異なり、「*unstabelnes*と*unrestfulnes*」「*herte*と*mynde*」という2つの対応関係が見られるものである。どちらの例も名詞句のワードペアで、同じ系統とも言えそうなフレーズなのだが、果たしてこれらを同列に語ることができるかどうかは疑問である。特に後者、接頭辞 un- によって形式的にも音的にも揃えられている部分が、決して名詞同士のペアの部分の補足に止まるとは考え難い。

これまでに挙げたフレーズの様々な例は、単語からフレーズへ、あるいはペアからフレーズへと発展していく段階を示唆するものであったり、その進み方の段階が異なることを示すものと言えるのかもしれない。実際にはこのような例や、またこれほど明確に割り切れない例も多いため、ワードペアやフレーズを分析する際には大きな障害ともなり、また考察においては問題点も多く残ることは事実である。ここで述べた点も踏まえて、ワードペアおよびフレーズの分析は慎重に進めたいと考える。以下、*Cloud* での用例に即して、特に「3語以上の単語が列挙された表現」⁶についてさらに考察を加えてみたい。

3語以上の単語が列挙された表現

・4語からなる表現

1698 alle other *counfortes*, *sounes*, and *gladnes*, and *swetnes*

これは4語がほぼ並列して列挙されている表現のようにも見える。これら4語のうち、特に *comfort*, *sound*, *sweetness* については、*Cloud* の中では別の組み合わせ方によっても用いられている。

・3語からなる表現

149 *sounes*, *counfortes*, and *swetnes*

1708 *counfortes* and *sounes* and *swetnes*

上は *sound*, *comfort*, *sweetness* の3語からなる表現である。さらに、こうした表現の構成要素である各語に関して詳しく調べてみると、そのうちの2語、*sound* と *sweetness*、*comfort* と *sweetness* の2組の組み合わせからなるペアの例を、3語以上の表現の前後の箇所で見ることができる。

146-147 *sounes* and *swetnes*

1693 *swetnes* and *counfortes*

6 前項2.1.で扱ったいくつかの表現には、何らかの形でフレーズとしての分析が必要なものも含まれていると考えられる。ただ、“a gretter *feruour* of *desire* and gretter *love-longing*” (*Cloud* 2514) といった例などを見ると、表現によっては、andの左右が何語かといった問題はさほど大きくないようにも思われる。

以上のように見てくると、この用例に関して言えば、始めから単語が同列に組み合わせられたというよりも、特定の2語の間にあるワードペアとしての関係が積み重なって3語以上になったと分析できると考えられる。このように、3語以上からなる表現であっても、その根底には2語の結び付きがあるものとして「分解」できるものも多いのではないだろうか。

いくつかのフレーズを精査してみると、フレーズの中には別の箇所でもワードペアとして用いられている語が見られることも多い。それを踏まえて考えると、おそらく著述する者にとってはフレーズはワードペアと非常に近いものとして認識されていた、あるいは、ペアの集まったものがフレーズという捉え方がなされていた、などの可能性を示すものであろう。もちろん多くは推測に基づくもので、明らかにすべき課題は多いが、この項で集めた用例からすると、基本的にはフレーズからなる表現はワードペアと強い関連性を持ち、共通する部分が大きいのと言えるであろう。したがって、機能、性質や区分についての考察といった、これまでにワードペアに対してなされてきた分析が、こうしたフレーズの表現にどこまで適用できるのかといった観点で、さらに検証していく必要があるのかもしれない。

3. ワードペアとそれに関連した表現の組み合わせについて

各テキストにおいては、例えば *Cloud* 604 のように、連続して複数のペアが見られる箇所も多い。

604 *bodily and goostly, quik and dede*

上の例に限らず、こうした箇所で見られているのは、QUICK & DEAD, BODILY & GHOSTLYなど他の作品にも共通して見られるタイプのペアだけではない。これまでも挙げたいくつかの例のように、他のテキストにはほとんど見られないペア、おそらくここで著者が新規に組み合わせたと考えられる表現、重要な語からなる表現なども含めて構成されていることもある。

このような連続した用例は、一つには Stone が以下で言うところの、文体における「バランス」を取ろうとする傾向の表われであると考えられる。

The rhetorical types of repetition ... also provide balance and rhythm: ... (p.134)

Balanced words, phrases, and sentences; antithesis, pairs and series all mingle freely in various combinations to achieve rhythmic balance with enough variation to relieve monotony. (p.135)

さらに、ワードペアだけでなく、フレーズと組み合わせているような用例、あるいはフレーズ自体が連続するものについても、Stone によって指摘されたような文体上の機能を果たすものと言うことができる。*Cloud* においても、ペアや関連する表現が複雑に混じり合った用例は多いが、以下のような例にその一端を垣間見ることができる。

1493-1494 a ful *greet restfulnes* and a ful *hole* and a *clene disposicion*, as wele in *body* as in *soule*

これについては、ワードペアという観点からすると頻出すると言える *body, soul* (ここでは *and* や *or* によっては結び付けられていない) を含め、いくつかの語句からなる組み合わせと “*as well ... as ...*” などの表現が一体となって、文体を形成していると言うことができるだろう。

逆に一つ一つのペアに着目した場合、ペアの分布を丹念に調べてみると、例えば *CLOUD & DARKNESS* のペア 8 例は、テキストの前半では多く見られるが後半では見られない点 (全 2529 行で、580 の例が最後) また “*wetyng and fehyng*” というペアは作品を通して見られるが、特に 1520 から 1576 までの 57 行で 15 例 (1554-1555 *wote and felith* などを含む) が集中している点など、1 作品の中でもあるペアが特定の箇所に集中して見られるといったケースも多い。このようなワードペアの「偏り」に関して、そこで用いられているワードペアを分析していくと、頻出するからといって慣用句的であるのではなく、むしろ意味的に重大なものや、本論文で扱ったテキストにおいては教義に関係する語句を中心にして、ペアやフレーズが成り立っていることが多いようにも思われる。こうしたワードペアの用例は、特に重要な点を強調するものであり、また時には丁寧に教えようとする態度の表われでもあったと推測される。

ここまで、ワードペアとその周辺に位置付けられる表現に着目して考察を進めてきた。前述したように、諸作品を見渡すと「ペア」の形に収まらない用例も多くあり、1 語とフレーズ、フレーズ単位で語句を組み合わせたもの、また元々定型句的なペアだったものを崩して用いたような表現など、そのパターンには非常に複雑なものがあつた。一方で、そうしたフレーズにも根底には語同士の結び付きがあることを示す例も多く、著者や読者等にとってはワードペアのヴァリエーションの 1 つとして捉えられていた可能性もある。そのような場合、フレーズの中にもワードペアの潜在的・間接的な影響があるものとして考察すべき課題が残されているのかもしれない。また、ワードペアやフレーズと文体との関係に関して言えば、ワードペアが文体の形成に寄与しているに加えて、フレーズなどの関連する諸表現についても、それぞれに応じた様々な影響を与えていると考えられる。以上の点からも、中世英語における多彩なワードペアが、作品において果たす役割は大きいと言えるであろう。

Bibliography

Texts

Cloud

Gallacher, Patrick J., ed. *The Cloud of Unknowing*. Originally Published in *The Cloud of Unknowing*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1997. TEAMS Catalogue: Gallacher. TEAMS Middle English Texts. <<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/gallachr.htm>>.

PC

Hodgson, Phyllis. *The Cloud of Unknowing and the Book of Privy Counselling*. EETS O.S. 218. London: Oxford UP, 1944, revised reprints, 1958, 1973, reprinted 1981.

Julian

Baker, Denise N., ed. *The Showings of Julian of Norwich*. Norton Critical Editions. New York: W. W. Norton, 2005.

Margery

Meech, Sanford Brown and Hope Emily Allen, eds. *The Book of Margery Kempe*. EETS O.S. 212. London: Oxford UP, 1940.

Mirror

Oguro, Shoichi, ed. "Friday" in *Waseda M \mathcal{Q} NE3691*) Waseda, 1999.

Oguro, Shoichi and Shigehiro Aoki, eds. "De Sacramento" in *Waseda M \mathcal{Q} NE3691*) Waseda, 2000.

Oguro, Shoichi, alioque asserviente, eds. "Saturday" in *Waseda M \mathcal{Q} NE3691*) Waseda, 2003.

References

Crampton, Georgia Ronan, ed. *The Shewings of Julian of Norwich*. Originally Published in *The Shewings of Julian of Norwich*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1994. TEAMS Catalogue: Crampton (1994; rev. 1996). TEAMS Middle English Texts. <<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/crampton.htm>>.

Kikuchi, Kiyooki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42、平成7年4月(1995年) pp.1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)

Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.

- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.

- . "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4.1.1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 1983. 77-84.

Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959): 113-160.

Staley, Lynn, ed. *The Book of Margery Kempe*. Originally Published in *The Book of Margery Kempe*, Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1996. TEAMS Catalogue: Staley. TEAMS Middle English Texts. <<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/staley.htm>>.

Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.

Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号、1971年、pp.1-44.

谷明信 「初期中英語 the ' Wooing Group 'のWord Pairsの用法とその特徴」 『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊、2003年、pp.19-24.

橋本功 『聖書の英語 - 旧約原典からみた - 』英潮社、1995年

